

「人生最後の祈り」

使徒行伝 7章 54節～60節

説教 本庄 侑子 牧師

キリスト教会最初の殉教者、ステパノの最後の祈りをお読みしています。私にとっては初めての説教で選んだ箇所です。東京神学大学に入学して1年目。学生寮の寮拝でのことでした。原稿を読み返すと、罪赦され、新しい命に生かされていることが嬉しくて仕方がない。そんな様子が伝わってきて、かつての自分に叱咤激励されたような気分でした。

そしてまた、教会に通い始めた頃のこととも思い出しました。神が人となって十字架にかかって死なれた。私のために。それほど私は愛されている。そう聞いた時の衝撃。嬉しさ。ポロポロとこぼれてきた涙。それまで憎くて仕方がなかった人たちも、神様に愛されている人たちだった。そう思うと全然違う人に見えてきました。これまでの私はもう終わりにしたい。私も人を愛して生きていきたい。神様、私を変えてください。そんな祈りが満ちてきました。それが、信仰を求めようになり、洗礼を受けたいと思ったきっかけでした。

今日の箇所を読んだ時も、心を鷲掴みにされたことを覚えています。どんなに責められても、私は悪くない！と自己弁護するのではなく、イエス様の愛を証しした人がいた。殺されていく中、自分のための叫びをあげるのではなく、自分を殺す人たちをかばう祈りを捧げた人がいた。人はこんな風に生き、死んでいくことができるんだ。私もこんな人になりたい。そんな素朴な憧れと真剣な祈りが深められました。そして次第に気づいていきました。聖書が伝えたいのはステパノのすごさではない。あなたもこうなれる、ということなんだと。

ステパノは、人々の怒り、殺意に囲まれた時、聖霊に満たされ、天を見つめて言いました。「ああ、天が開けて、人の子が神の右に立っておいでになるのが見える。」(56節)人の子とはイエス様のことです。死から復活し、天に上げられたイエス様は今、神の右に座しておられる。そう使徒信条は言い表します。しかし、ステパノが見たのは神の右に立っておられるイエス様の姿でした。初代教会はこれを、イエス様がステパノを天に迎えるために身を乗り出し、立ち上がっておられる姿と受け取っています。

ステパノを囲んでいたのは、人の憎しみ、殺意のはずでした。しかし、ステパノの心を満たしていたのは聖霊でした。聖霊はステパノに、憎しみも殺意も全部打ち破って復活してくださ

ったイエス様のお姿を見せていました。理不尽な力に殺されようとしている今も、天から身を乗り出してでもステパノを掴んで離さないイエス様。むしろ、このような時だからこそ、もっともってステパノを抱き上げようとするイエス様を見せていました。

石を投げつけてられている間も、ステパノは祈りつづけました。「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」(59節)。「主よ、どうぞ、この罪を彼らに負わせないでください」。(60節)二つともイエス様の十字架上の祈りと似ています。これらは、神の子イエス様だから祈れた祈りではなかったのです。

むごいといしか言いようがない人生の最後を前にしても、ステパノは、決して奪われることのない恵みを見つめていました。罪を赦し、永遠の命を与えて下さる方に向かって、私の主よと呼びかけることができる恵み。自分の命を敵意に引き渡すのではなく、ただ死に呑み込まれるのではなく、罪と死に勝利された、愛するイエス様の手に委ねることができる恵み。この苦しみも、痛みも、敵意をむき出しにされる辛さも全部知っておられ、その身に負って下さったイエス様。私のために、そして、この人々のためにも十字架の苦しみを受け、命を捨てて下さったイエス様。

ステパノの目は、殺されていく絶望的な状況に奪われることはありませんでした。ステパノの心も、人々への恨みに奪われることはありませんでした。聖霊のお働きの中で、罪も死も支配されるイエス様を見つめ、イエス様の祈りに満たされた姿で地上の命を終えました。人の目には、一人の人が残酷な死を迎えたように見えたでしょう。しかし、真実は違ったのです。復活のイエス様の愛と赦し、永遠の命こそが、それらに勝利したのです。

ステパノは特別な人ではありません。イエス様に捉えていただいた、ただの人です。あなたもこうなれる。こうなりたくないですか？イエス様は私たちにもそう問いかけ、信じることへと招いてくださいます。私たちはもう、罪や死の奴隷ではない。もう憎しみに憎しみを返さなくていい。もう死を恐れなくていい。私たちは、罪と死に勝利され、復活してくださった、イエス様のものだからです。

(記 本庄 侑子)